

## 事務局ごよみ

刊行から1年以上たち、少々タイミングを逸してしまった気もするが、本誌で取り上げられないのは惜しい一冊を紹介したい。保苅実『ラディカル・オーラル・ヒストリー—— オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』（御茶の水書房、2004年、2200円＋税）。もっとも、すでに新聞の書評欄やインターネットなどで賞賛されている書物とあれば、限られた紙面で不十分な紹介になるよりは、既出の論評を参照していただく方がいいだろうし、また本書に「あとがき」を寄せた人々の方が紹介者として適任である。内容紹介をおいておきながら言及するのは、私個人の思い入れからである。



私が著者の保苅さんと遭遇したのはただの一度、3年前に開かれた市民外交センター設立20周年記念シンポジウムの席のこと。茶目っ気があって元気な若手だなというのがその時の印象だった。そのシンポの報告として、私は彼の「世界を変えたい」という発言を引用し(私の記憶が正しければだが)、「その発言の落とし前をつけていただく?ことを条件に歓迎したい」と書いた(本誌第86号、2002年7月)。それから2年後、このような形で「落とし前」がつけられることになるとは思っていなかった。見事である。著者のユニークな発想と生産性の高い筆力に驚くと同時に、無責任で勝手なエールを他人に送っておきながら、「落とし前」の実現可能性を実はあまり考えていなかった自分が恥ずかしくなった。そしてそのまた1年後に再びこの本を手に取りながら、棚上げしていた自分自身の「落とし前」のつけ方をどうしたものか、考えている。

それにしても、自分より才気活発で若い研究者が先に亡くなってしまった感慨にとらわれていると、我ながら結構年をくったものだと思わずにはいられない。しょうもない私個人の感慨はともかくとして、「世界を変えたい」という保苅さんの思想と実践がどのようなものであったのか、本書と対話していただくことをお勧めする。

(東村 岳史)